

実数の集合論で可算順序数の概念を使う いくつかの面白い例の紹介

後藤 達哉
2025 年 12 月 18 日 作成

概要

本記事は Mathematical Logic Advent Calendar 2025 の 12 月 18 日の記事である。連続体の基数不変量などの実数の集合論では、自然数の組合せ論、実数の組合せ論はよく使うが、 ω_1 は出てくることが比較的少ないと思う。そのような中で、 ω_1 を使う議論をいくつか紹介する。具体的には第 1 章で Laver 木と Lebesgue 外測度の関係、第 2 章で $\mathfrak{b} = \omega_1$ が非可算な meager additive set の存在を導くこと、第 3 章で Laver 強制法および Hechler 強制法の rank argument を紹介する。

目次

1 Laver 木と Lebesgue 外測度	1
2 $\mathfrak{b} = \omega_1$ は非可算 meager additive set の存在を導く	2
3 Laver 強制法と Hechler 強制法における rank argument	4
3.1 Laver 強制法	4
3.2 Hechler 強制法	5

1 Laver 木と Lebesgue 外測度

Laver 木とは $\omega^{<\omega}$ の部分木 T であり、あるノード $s \in T$ があり、 s の下では分岐はなく、 s より上 (s を含む) のノードは全て無限分岐するものである。この s は T から一意に定まるから、それを $\text{stem}(T)$ と書く。

Laver 木全部の集合を \mathbb{L} と書く。

μ^* は Cantor 空間 2^ω の Lebesgue 外測度を表すものとする。

定理 1.1 (Pawlikowski [Paw96]). $\langle A_t : t \in \omega^{<\omega} \rangle$ を各 A_t が $A_t \subseteq 2^\omega, \mu^*(A_t) \leq a$ を満たし、かつ $A_t \subseteq \liminf_n A_{t \smallfrown n}$ を各 $t \in \omega^{<\omega}$ について満たす族とする。このとき

$$\mu^*\left(\bigcap_{T \in \mathbb{L}} \bigcup_{t \in T} A_t\right) \leq a$$

となる。

証明. 族 $\langle A_t^\alpha : \alpha < \omega_1, t \in \omega^{<\omega} \rangle$ を次のように帰納的に定める。

$$\begin{aligned} A_t^0 &= A_t \\ A_t^{\alpha+1} &= \liminf_n A_{t \smallfrown n}^\alpha \\ A_t^\gamma &= \bigcup_{\alpha < \gamma} A_t^\alpha \quad (\gamma \text{ is limit}) \end{aligned}$$

仮定より A_t^α は α について単調増大で、かつ外測度はどれも $\leq a$ である。

よって、各 $t \in \omega^{<\omega}$ について $\alpha_t < \omega_1$ が取れて、 $\mu^*(A_t^{\beta+1} \setminus A_t^\beta) = 0$ for every $\beta \geq \alpha_t$ となる。
 $\alpha = \sup_{t \in \omega^{<\omega}} \alpha_t$ と置く。したがって、

$$\mu^*(A_{\emptyset}^{\alpha+1} \cup \bigcup_{t \in T} (A_t^{\alpha+1} \setminus A_t^\alpha)) \leq a$$

となる。今、次を主張する：

$$\bigcap_{T \in \mathbb{L}} \bigcup_{t \in T} A_t \subseteq A_{\emptyset}^{\alpha+1} \cup \bigcup_{t \in T} (A_t^{\alpha+1} \setminus A_t^\alpha). \quad (1)$$

この主張 (1) を示せば、定理の証明も終わる。そこで主張を示そう。 $x \notin A_{\emptyset}^{\alpha+1} \cup \bigcup_{t \in T} (A_t^{\alpha+1} \setminus A_t^\alpha)$ とする。木の列 $\langle T_i : i < \omega \rangle$ を作り、各 T_i は高さ i 、各極大な元 $t \in T_i$ は $x \notin A_t^{\alpha+1}$ を満たすように作る。 $T_0 = \{\emptyset\}$ とおけば、 $x \notin A_{\emptyset}^{\alpha+1}$ より帰納法の基底ケースは問題ない。 T_i まで構成できたとする。 t が T_i の極大ノードのとき、 $A_t^{\alpha+1}$ の定義より集合 $X_t = \{n : x \notin A_{t \smallfrown n}^\alpha\}$ は無限集合である。

$$T_{i+1} = T_i \cup \{t \smallfrown n : t \text{ は } T_i \text{ の極大ノード, } n \in X_t\}$$

とおく。 $t \smallfrown n$ が T_{i+1} の極大ノードなら、 $x \notin A_{t \smallfrown n}^{\alpha+1} \setminus A_{t \smallfrown n}^\alpha$ より、 $x \notin A_{t \smallfrown n}^{\alpha+1}$ となり、帰納法の仮定は成り立ち続ける。最後に $T = \bigcup_i T_i$ と置けば、 $x \notin \bigcup_{t \in T} A_t^{\alpha+1}$ なのでこれで証明できた。□

この定理は Laver 強制法が Lebesgue 外測度を保つことを示す際の重要なピースである。

2 $\mathfrak{b} = \omega_1$ は非可算 meager additive set の存在を導く

Cantor 空間の部分集合 $X \subseteq 2^\omega$ が meager additive であるとは、任意の meager 集合 H について $X + H$ もまた meager となることを意味する。ここで $X + H = \{x + h : x \in X, h \in H\}$ である。なお Cantor 空間の元同士の和は成分ごとの modulo 2 の和で定める。

meager additive な集合が可算集合しかないことが無矛盾なことが知られている。また、連続体仮説の下で非可算な meager additive な集合が存在することは比較的簡単に示せる。以下の定理はその仮定を弱めたものである。

定理 2.1 (Bartoszynski [Bar03]). $\mathfrak{b} = \omega_1$ ならば、非可算 meager additive set が存在する。

証明。 $\mathfrak{b} = \omega_1$ を仮定する。すると列 $\langle f_\alpha : \alpha < \omega_1 \rangle$ であって \leq^* の意味で単調増大かつ非有界な ω^ω の狭義単調増加関数からなるものがとれる。 $2^{<\omega}$ の部分完全木を要素とする ω_1 木 (T, \supseteq) を構成する。 T_α を T のレベル α とする。次の条件を要請する。

- (1) 任意の $\alpha < \beta < \omega_1$ と $n \in \omega$ と $p \in T_\alpha$ について、ある $q \in T_\beta$ があって、 $q \subseteq p$ かつ $q \cap 2^n = p \cap 2^n$.
- (2) 任意の $\alpha < \omega_1$ と $p \in T_{\alpha+1}$ について、有限個を除いた全ての自然数 n で $p \cap 2^{f_\alpha(n)} \leq 2^n$ が成り立つ。
- (3) 任意の $\alpha < \omega_1$ について T_α は可算。

この T を下から順に構成しよう。

ベースステップ。 $T_0 = \{2^{<\omega}\}$.

後続ステップ。 T_α が構成されたとする。 $p \in T_\alpha$ とする。次のような $\langle q_n : n \in \omega \rangle$ を取る。

- (1) $q_n \subseteq p$ for every n .
- (2) $q_n \cap 2^n = p \cap 2^n$ for every n .

(3) $[q_n] \cap [q_m] = \emptyset$ for every $n \neq m$.

(4) 任意の n について, 有限個を除いた全ての k で $|q_n \cap 2^{f_\alpha(k)}| \leq 2^k$.

つまり, 完全集合 $[p]$ の部分集合を可算個の完全集合 $[q_n]$ たちに分割しつつ, (2) のように q_n と p は下の方では変わらないようにし, (4) を満たすくらい各々が薄い木となるようにするのである. これは可能である.

各 $p \in T_\alpha$ についてこのような $\langle q_n : n \in \omega \rangle$ を取り, レベル $T_{\alpha+1}$ に置く.

極限ステップ. γ を極限順序数, T_α ($\alpha < \gamma$) を構成済みと仮定する. $p \in \bigcup_{\alpha < \gamma} T_\alpha$ と $n \in \omega$ を固定する. $q = q(p, n)$ を以下のように定め, γ レベルにこの q を置く. 列 $\langle \alpha_k, n_k, p_k : k \in \omega \rangle$ を構成して次を満たすようにする. $p_0 := p, n_0 := n$ とする.

(1) $p_k \in T_{\alpha_k}$,

(2) $\sup_k \alpha_k = \alpha, \lim_k n_k = \infty$,

(3) $p_{k+1} \subseteq p_k$,

(4) $p_{k+1} \cap 2^{n_k} = p_k \cap 2^{n_k}$.

数列 $\langle n_k : k \in \omega \rangle$ を十分増大度を大きくするように以上の構成を行えば, $q := \bigcap_k p_k$ は完全木となる.

以上で木 T を構成できた.

各 $p \in T$ について $x_p \in [p]$ を選択し, $X = \{x_p : p \in T\}$ とおく. X の濃度が \aleph_1 になるように x_p たちを選ぶことが可能である.

この X が meager additive set であることを証明しよう.

H を meager set とする. よく知られた事実 (たとえば [Bla10] の Theorem 5.2) より $x_H \in 2^\omega$ と狭義単調増大関数 $f_H \in \omega^\omega$ が取れて,

$$H \subseteq \{x \in 2^\omega : \forall^\infty n \exists j \in [f_H(n), f_H(n+1)) \ x(j) \neq x_H(j)\}$$

となる. 証明すべきことは $X + H$ が meager なことであるので, 平行移動を施して, $x_H(k) = 0$ for all k を仮定して良い. $\langle f_\alpha : \alpha < \omega_1 \rangle$ は非有界な族であるので, ある $\alpha_0 < \omega_1$ が取れて,

$$\exists^\infty n \exists k \ f_{\alpha_0}(n) < f_H(k) < f_H(k+2^n) < f_{\alpha_0}(n+1)$$

となる.

理由. 背理法. 全ての α について

$$\forall^\infty n \forall k \ [f_\alpha(n) \geq f_H(k) \text{ or } f_H(k+2^n) \geq f_\alpha(n+1)]$$

と仮定する. 各 $n_0, m \in \omega$ について関数 $G_m^{n_0}$ を

$$\begin{aligned} G_m^{n_0}(n_0) &= m \\ G_m^{n_0}(n+1) &= f_H(k_n + 2^n) + 1 \\ &\quad (\text{where } k_n = \min\{k : f_H(k) > G_m^{n_0}(n)\}) \end{aligned}$$

とおく. $G_m^{n_0}(n_0, m \in \omega)$ を全部 dominate する G を取る.

$\alpha < \omega_1$ を固定する. 背理法の仮定より $n_0 \in \omega$ が取れて,

$$\begin{aligned} \forall n \geq n_0 \forall k \ f_\alpha(n+1) &\leq f_H(k_n^* + 2^n) \\ &\quad (\text{where } k_n^* = \min\{k : f_H(k) > f_\alpha(n)\}) \end{aligned}$$

となる. $m := f_\alpha(n_0)$ とおく. n に関する帰納法で $\forall n \geq n_0 \ f_\alpha(n) \leq G_m^{n_0}(n)$ を示す. ベースケースは OK.

$f_\alpha(n) \leq G_m^{n_0}(n)$ を仮定すると $k_n^* \leq k_n$ が従う。よって

$$f_\alpha(n+1) \leq f_H(k_n^* + 2^n) \leq f_H(k_n + 2^n) < G_m^{n_0}(n+1)$$

となる。したがって、 f_α は $G_m^{n_0}$ に dominate される。つまり G にも dominate される。

$\alpha < \omega_1$ は任意だったので、これは $\langle f_\alpha : \alpha < \omega_1 \rangle$ が非有界なことに矛盾。

$\langle n_i, k_i : i < \omega \rangle$ で

$$\forall i \ f_{\alpha_0}(n_i) < f_H(k_i) < f_H(k_i + 2^{n_i}) < f_{\alpha_0}(n_i + 1) \quad (2)$$

となるものを取る。

$p \in T_{\alpha_0+1}$ を固定する。 $z_p \in 2^\omega$ を次のように定める。まず、与えられた十分大きな i について $p \cap 2^{f_{\alpha_0}(n_i)}$ の枚挙 $\langle s_j^i : j < 2^{n_i} \rangle$ を取る。 z_p は各 s_j^i と区間 $[f_H(k_i + j), f_H(k_i + j + 1)]$ 内で一致するよう取るのである。各区間は (2) より重なっていないことに注意。どの区間にも入っていない添字での z_p の値は何でもいい。

$$G_p := \{x \in 2^\omega : \forall^\infty i \ x \text{ と } z_p \text{ は区間 } [f_{\alpha_0}(n_i), f_{\alpha_0}(n_i + 1)) \text{ で agree しない}\}$$

とおく。各 G_p は meager である。今、 $[p] + H \subseteq G_p$ を主張する。 $x \in [p] + H$ とする。すると $y \in [p]$ がとれて、

$$\forall^\infty k \ x \text{ と } y \text{ は区間 } [f_H(k), f_H(k + 1)) \text{ で agree しない}$$

となる。十分大きな i について、ある j があって、

$$y \upharpoonright [f_H(k_i + j), f_H(k_i + j + 1)) = s_i \upharpoonright [f_H(k_i + j), f_H(k_i + j + 1)) = z_p \upharpoonright [f_H(k_i + j), f_H(k_i + j + 1))$$

となるが、これは

$$x \upharpoonright [f_H(k_i + j), f_H(k_i + j + 1)) \neq z_p \upharpoonright [f_H(k_i + j), f_H(k_i + j + 1))$$

を含意する。よって区間をより広げた

$$x \upharpoonright [f_{\alpha_0}(n_i), f_{\alpha_0}(n_i + 1)) \neq z_p \upharpoonright [f_{\alpha_0}(n_i), f_{\alpha_0}(n_i + 1))$$

も成立する。これは $x \in G_p$ を意味する。

$X_{\alpha_0} = \{x_p : p \in \bigcup_{\alpha \leq \alpha_0} T_\alpha\}$ とおく (X の定義のところで選択した点のうち $\bigcup_{\alpha \leq \alpha_0} T_\alpha$ から来るもの全部)。 X_{α_0} は可算集合なので、 $X_{\alpha_0} + H$ は meager である。また、 $\bigcup_{p \in T_{\alpha_0+1}} [p] + H \subseteq \bigcup_{p \in T_{\alpha_0+1}} G_p$ も meager set の可算和なので、meager である。したがって、

$$X + H \subseteq (X_{\alpha_0} + H) \cup \bigcup_{p \in T_{\alpha_0+1}} ([p] + H)$$

も meager となる。 □

3 Laver 強制法と Hechler 強制法における rank argument

この節では強制法の知識を仮定する。

3.1 Laver 強制法

本節の内容は [BJ95] を参考にした。

第 1 節で考察した、Laver 木の集合 \mathbb{L} に次の順序を入れる： $T' \leq T \iff T' \subseteq T$ 。

また次の順序も考える： $T' \leq_0 T \iff T' \leq T \wedge \text{stem}(T') = \text{stem}(T)$.

$T \in \mathbb{L}$ と $s \in T$ に対し $T_s = \{t : s \subseteq t \text{ or } t \subseteq s\}$ とおく．これは s より下にある分岐を全部刈り取ってできる新しい \mathbb{L} の条件である．

$D \subseteq \mathbb{L}$ を開かつ稠密な集合とする． $T \in \mathbb{L}$ と $s \in T$ に対し，そのランク $r_T(s)$ を次で定める．

- (1) $r_T(s) = 0$ となるのは $T' \leq_0 T_s$ が存在して $T' \in D$ となるとき．
- (2) $r_T(s) \neq 0$ のとき，

$$r_T(s) = \min\{\alpha : \exists U \in [\omega]^\omega \forall n \in U \ r_T(s \frown n) < \alpha\}.$$

任意の $s \in T$ に対して， $r_T(s)$ は定義される．実際， $r_T(s_0)$ が定義されない s_0 があるとしたら， $\{n : r_T(s \frown n) \text{ が定義されている}\}$ が有限集合となる．すると帰納法により $S \in \mathbb{L}$, $S \leq T_{s_0}$ を作って，任意の $s \in S$ について $r_T(s)$ が定義されていないようにできる． $S' \leq S$ を $S' \in D$ なる元とする．しかし，すると $r_T(\text{stem}(S')) = 0$ となって矛盾．

またランクに関する帰納法で $T' \leq T$ かつ $s \in T'$ のとき $r_T(s) \leq r_{T'}(s)$ もわかる．さらに T' と T で s より上を変えていない ($T_s = T'_s$) ときには，逆向きの不等号も言えて， $r_T(s) = r_{T'}(s)$ となる．

以下が Laver 強制法の pure decision と呼ばれる性質である．

定理 3.1. $A \in [\omega]^{<\omega}$ とし， $T \Vdash_{\mathbb{L}} \dot{a} \in A$ とする．すると $T' \leq_0 T$ と $a \in A$ が存在して $T' \Vdash \dot{a} = a$ となる．

証明． $D = \{T' \in \mathbb{L} : T' \text{ は } \dot{a} \text{ の値を決定している}\}$ とおく． D は開かつ稠密な集合である． D に関するランク関数を r で表す． $r_T(\text{stem}(T))$ に関する帰納法で定理を示す．

$r_T(\text{stem}(T)) = 0$ ならば， r の定義より結論は明らか． $r_T(\text{stem}(T)) = \alpha > 0$ としよう．するとある $U \in [\omega]^\omega$ があって，全ての $n \in U$ で $r_T(\text{stem}(T) \frown n) < \alpha$ ．よって，定理の前の注意を使うことで， $r_{T_{\text{stem}(T) \frown n}}(\text{stem}(T) \frown n) < \alpha$ でもある．帰納法の仮定より各 $n \in U$ について $T^n \leq_0 T_{\text{stem}(T) \frown n}$ があって T^n は \dot{a} を決定している．必要に応じて U を縮めることで， T^n ($n \in U$) が決定している \dot{a} の値は一定だとしてよい (A は有限集合なことに注意)．そこで $T' = \bigcup_{n \in U} T^n$ とおけばこれが所望の条件である． \square

3.2 Hechler 強制法

本節の内容は [Bre09] を参考にした．

記号の乱用で自然数の無限集合 A に対して $A(n)$ でその小さい方から数えて n 番目の要素を表す．

Hechler 強制法を $\mathbb{D} = \{(s, \varphi) : s \in \omega^{<\omega}, \varphi : \omega^{<\omega} \rightarrow \omega\}$ かつ $(t, \psi) \leq (s, \varphi)$ を $s \subseteq t$, ψ は φ を everywhere dominate する，かつ任意の $i \in |t| \setminus |s|$ について $\varphi(t \restriction i) \leq t(i)$ と定める．

\dot{A} を ω の無限部分集合の \mathbb{D} -name とする． $s \in \omega^{<\omega}$ と $n, k \in \omega$ について， s が $\dot{A}(n) = k$ を好むとは，第一成分が s の条件であって， $\dot{A}(n) \neq k$ を強制するものは存在しないことを意味する．

ランク $r_n(s)$ を次で定める．

- (1) $r_n(s) = 0$ iff ある k について， s が $\dot{A}(n) = k$ を好む
- (2) $r_n(s) \neq 0$ のとき $r_n(s) = \min\{\alpha : \exists^\infty l \ r_n(s \frown l) < \alpha\}$ ．

$r_n(s)$ は全ての n, s について定まる．実際， $r_n(s)$ が未定義な s があったとしよう．するとほとんど全ての l について $r_n(s \frown l)$ も未定義である．したがって，次のような $\varphi : \omega^{<\omega} \rightarrow \omega$ を構成できる： $s \subseteq t$ かつ， $\varphi(t \restriction i) \leq t(i)$ for all $i \in |t| \setminus |s|$ ならば， $r_n(t)$ は未定義．条件 (s, φ) を考えよう．条件

$(t, \psi) \leq (s, \varphi)$ で、 \dot{A} の第 n 要素がある k であることを強制するものを取る。すると $r_n(t) = 0$ である。しかし、 $r_n(t)$ は未定義であったので矛盾。

自然数の無限集合 A, B に対して、 B が A を split するとは、 $B \cap A$ と $B \setminus A$ の両方が無限集合となることを意味する。

定理 3.2. \dot{A} を ω の無限部分集合の \mathbb{D} -name とする。すると $\langle A_i : i \in \omega \rangle$ があって、 $B \in [\omega]^\omega$ が全ての A_i を split するならば、 $\Vdash_{\mathbb{D}} B$ は \dot{A} を split する。

証明. $s \in \omega^{<\omega}$ とする。もし $r_n(s) = 0$ となる n が無限個ある場合は、そのような n について k_n を見つけ、 s が $\dot{A}(n) = k_n$ を好むようにする。 $k_n \geq n$ であることに注意。 $A_s = \{k_n : r_n(s) = 0\}$ とおく。

$s \in \omega^{<\omega}, n \in \omega$ とし、 $r_s(n) = 1$ と仮定する。すると無限個の l があって、 $r_n(s \smallfrown l) = 0$ である。そのような各 l について、 $s \smallfrown l$ が $\dot{A}(n) = k^{s,n,l}$ を好むようにとる。 $A^{s,n} = \{k^{s,n,l} : l \in \omega, r_n(s \smallfrown l) = 0\}$ とおく。 $A^{s,n}$ は無限集合である。実際、各 $k \in \omega$ について $\{l : k^{s,n,l} = k\}$ は有限集合となる。なぜなら、もしこれが無限集合だったら、 k を witness として $r_n(s) = 0$ となるからである。

さて、もし B が全ての $A_s, A^{s,n}$ たちを split するなら \Vdash “ B は \dot{A} を split する” を示そう。

(s, φ) を条件とし、 $m \in \omega$ とする。次を示す必要がある： $(t, \psi) \leq (s, \varphi)$ と $m_0, m_1 \geq m$ があり、 $m_0 \in B, m_1 \notin B$ かつ $(t, \psi) \Vdash m_0, m_1 \in \dot{A}$ 。

まず、無限個の n が存在して、 $r_n(s) = 0$ だと仮定しよう。すると $B \cap A_s$ と $A_s \setminus B$ はともに無限集合だから、 $m_0, m_1 \geq m$ で $m_0 \in B \cap A_s$ かつ $m_1 \in A_s \setminus B$ なものを見つけられる。 A_s の定義より、ある n_0, n_1 があって s は $\dot{A}(n_0) = m_0$ と $\dot{A}(n_1) = m_1$ の両方を好む。すると $(s, \varphi) \nVdash \dot{A}(n_0) \neq m_0 \wedge \dot{A}(n_1) \neq m_1$ なので、ある $(t, \psi) \leq (s, \varphi)$ が取れて、 $(t, \psi) \Vdash m_0, m_1 \in \dot{A}$ 。

次に、有限個を除いた全ての n で $r_n(s) > 0$ だと仮定する。 $r_n(s) > 0$ なる $n \geq m$ を固定する。このとき、 s の延長 t であって、 $\varphi(t \restriction i) \leq t(i)$ for all $i \in |t| \setminus |s|$ かつ $r_n(t) = 1$ となるものを見つけることができる。

実際、これは $r_n(s)$ に関する帰納法で示される。 $r_n(s) = 1$ なら $s = t$ と取ればよい。 $r_n(s) > 1$ ならば、 $l \in \omega$ であって、 $l \geq \varphi(s)$ かつ $1 \leq r(s \smallfrown l) < r_n(s)$ となるものを取れる。帰納法の仮定により $s \smallfrown l$ は所望の t に延長できる。

さて、 $B \cap A^{t,n}$ は無限集合だから、 $l \geq \varphi(t)$ であって、 $k^{t,n,l} = m_0$ であって、 $m_0 \in B \cap A^{t,n}$ となるものが取れる。

よって、 $t \smallfrown l$ は $\dot{A}(n) = m_0$ を好む。ゆえに、条件 $(u, \psi) \leq (s, \varphi)$ を見つけて、 $(u, \psi) \Vdash m_0 \in \dot{A}$ となる。

m_0 だけ見つけたが、 m_0, m_1 両方を見つけることも同じ議論で確かめられる。[TODO: ここをちゃんと書く]

□

参考文献

- [Bar03] T. Bartoszyński. “Remarks on small sets of reals”. *Proceedings of the American Mathematical Society* 131.2 (2003), pp. 625–630.
- [BJ95] T. Bartoszyński and H. Judah. *Set Theory: on the structure of the real line*. CRC Press, 1995.
- [Bla10] A. Blass. “Combinatorial cardinal characteristics of the continuum”. *Handbook of set theory*. Springer, 2010, pp. 395–489.

- [Bre09] J. Brendle. “Forcing and the structure of the real line: the Bogotá lectures”. *Lecture notes* (2009).
- [Paw96] J. Pawlikowski. “Laver’s forcing and outer measure, Set theory (Boise, ID, 1992–1994), 71–76”. *Contemp. Math* 192 (1996).